

学生が「推し」に対して抱く感情と 恋愛観に関する検討

丸山 佳純 中村 雅子

ファンが「推し」に対して抱く感情と自身の恋愛状況や恋愛観との関連を分析、検討した。2024年9月19日から10月3日までの15日間にオンライン調査を実施し、学生125名の回答を分析した。回答者の約9割が「推し」がいる、あるいはいたと回答し、恋人がいない者の方が「推し」がいる者が多い一方で、恋人がいる者の方が「推し」に対して抱く感情が強いことが示された。今回の調査では先行研究の恋愛観の構造がほぼ同様の形で確認されたほか、恋愛を幸せな気分させてくれるものだと捉え、パートナーとの相互理解を重視するなど、恋愛イメージが肯定的な者ほど「推し」への想いもより強く、「推し」に対して恋愛感情を伴う好意を抱くようになることが明らかになった。

キーワード：「推し」、恋愛観、ファン心理、疑似恋愛、大学生、オンラインアンケート

1. 問題意識

「推し」ならびに「推し」を応援する行為全般を指す「推し活」への注目度が高まっている。「推し活」は、2021年に発表されたユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされた。矢野経済研究所の発表^(注1)によると2022年時点でオタク市場は8000億円に迫り、さらに市場規模が拡大されることが予想されている。

デジタル大辞泉では、「推し」とは「他の人にすすめること。また俗に、人にすすめたいほど気に入っている人や物」と説明されている。「推し」に関する研究も盛んに行われているものの、その一方で「推し」という言葉が指す対象については議論が続いている。大石(2023)では、「推し」概念の拡張に触れる際、「推し」の定義について複数の文献を参照している。「空気ほど差し迫ってはいないが、水くらい、無いと生きられない感覚」、「突然『現れ』て、自分を夢中にさせる存在」、「対象をただ受身的に愛好するだけでは、飽き足らず、能動的になにか行動してしまう対象」など「オタクの数だけ、推しとは何なのかの答えがある」としている。大石は、これらの定義を踏まえて、もともとアイドルグループの中で一番好きなメンバーを指して使われていた「推しメン」という言葉が他ジャンルへ浸透し、この世のあらゆるものを全てを対象に「好意」を抱く存在が「推し」であるとまとめた。また「推し」を推す主体である「ファン」なら

びに「オタク」に関して、構成概念が類似しており、推しとなる対象の境界線も曖昧になっているとしている。

栗津他(2021)は「アニメやゲームや漫画等の2次元のキャラクターに対して恋愛感情を抱いている人」を「夢女子」、「実在する3次元のアイドルやタレントに対して恋愛感情を抱いている人」を「リア恋」と説明し、「推し」に対して恋愛感情を抱くオタクの存在について言及した。このようなオタクにとって「推し」が娯楽の域を越えることも珍しくはない。「推し」に対して恋愛感情を抱いているのであれば、実生活における恋愛観や結婚観も「推し」がいない者とは異なる考えとなるだろう。

以上の観点から、「推し」に対して抱く感情とファンやオタク自身の恋愛観との関連を検討する。なお、本研究では「芸能人、スポーツ選手、アーティストやアニメ・ゲーム・漫画のキャラクターなど、魅力を感じているある特定の人物(グループ、チームを含む)」を「推し」と定義することとする。

2. 先行研究

2.1 ファン心理に関する研究

小城(2002)は大学生を対象としてファン心理に関する自由記述形式の調査を行った。ファン心理は「作品の評価」、「本人への好意」、「流行意識」に分類され、とくに「本人への好意」が「好意」と「疑似恋愛感情」などの下位側面を持つことや、ファン対象の職業によってファン心理が異なることを明らかにした。この研究に基づき小城(2004)は、ファン心理とファン行動を分類することを目的に、大学生を対象とした質問紙調査を行った。小城(2004)によると、ファン心理は「作品の評価」、「疑似恋愛感情」、「外見的魅力」、「同一視・類似

MARUYAMA, Kasumi
東京都市大学メディア情報学部
社会メディア学科2024年度卒業生
NAKAMURA, Masako
東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

性」,「流行への同調」,「ファン・コミュニケーション」,「尊敬・憧れ」,「流行への反発・独占」の8側面に分類され,「作品の評価」と「尊敬・憧れ」が主軸をなしている。ファン行動は「情報収集」,「熱狂行動」,「作品の収集・鑑賞」,「模倣行動」,「宣伝行動」の5側面に分類され,「情報収集」と「作品の収集・鑑賞」が主要な行動であることがわかった。あわせてファン心理別の行動特性も分析している。「情報収集」はおおよそどのファン心理とも関連があり,もっとも一般的なファン行動であるが,「熱狂行動」「模倣行動」は,ファン対象本人への感情移入や漚依が,「作品の収集・鑑賞」「宣伝行動」は,作品自体の評価や,周囲との共有が動因となっておりと推測されている。本研究では実生活における恋愛観との関連を測定することを目的としているため,「擬似恋愛感情」を抽出している小城(2004)のファン心理尺度を利用することとした。

2.2 恋愛イメージと「推し」との関連

金政(2002)は恋愛に対する期待や態度を示す恋愛イメージ尺度の作成と検証を行った。恋愛イメージ尺度の作成のために収集した自由記述,ならびにその補強として行われたブレイン・ストーミングでの回答から尺度項目を選定し調査を行なった。その結果,恋愛イメージ尺度は「大切・必要」,「刹那的・付加価値」,「成長」,「相互関係」,「献身的」,「独占・束縛」,「衝動的」の7因子により構成されることが明らかになった。また,恋愛へのイメージを回答者の属性によって比較すると,最も親しい異性との関係が親密な回答者ほど,恋愛に対してポジティブなイメージを抱きやすく,女性は男性よりも恋愛を「成長」として捉えやすいことが示されていた。なお,この尺度は特定の相手を想定させない形で回答を求めるため,回答者に親密な相手がいない場合においても恋愛に対する期待や態度を測定することができる。そのため本研究では金政の尺度を用いて対象者の恋愛イメージを可視化し,「推し」に対して抱く感情との関連を分析する。

なお高野・奥野(2023)は,金政(2002)の恋愛イメージ尺度を用いて,恋愛を肯定的に捉えパートナーとの相互理解を重視している場合,「推し」への感情が恋愛感情に近づき,また恋愛自体に積極的な姿勢がある場合,「推し」に対しての好意も「恋愛的に好き」になると示唆している。

2.3 対人恐怖心性と「推し」との関連

清水・海塚(2002)は,健全な一般青年においても人見知りや過度の気遣い,対人緊張などの対人恐怖心性が認められる者は非常に多く存在しており,また,青年期の正常な発達過程においてもよく経験されると述べた。

清水らは,青年期の特徴として扱われる対人恐怖心性と自己愛傾向との関連を実証的に分析するため,堀井・小川(1997)による尺度を利用して,対人恐怖心性を「集団に溶け込めない」,「目が気になる」,「社会的場面で当惑する」,「自分を統制できない」,「生きることに疲れている」,「自分や他人が気になる」の6因子により構成されたとした。

この尺度を利用した高野・奥野(2023)は,対人関係において悩みを抱えている場合に「推し」への熱中度が高いことを明らかにした。

3. 目的

高野・奥野(2023)は,「『推し』と認識しつつも,恋愛感情を抱いている対象」を「恋愛的推し」と定義し,特に「恋愛的推し」を持つ者について,対人関係のあり方や捉え方が「推し」に対する感情や「推し」との関係性に及ぼす影響について検討した。この研究で示された内容を検証し,また回答者自身の現在の恋愛状況という変数も加えて「推し」に対して抱く感情を分析することを本研究の目的とし,以下の検証課題を中心に検討を行った。

検証課題1 恋愛イメージと「推し」に対して抱く感情,恋愛希望度,結婚希望度との関連

高野・奥野(2023)では,「『推し』と認識しつつも,恋愛感情を抱いている対象」を「恋愛的推し」と定義し,特に「恋愛的推し」を持つ者について,対人関係のあり方や捉え方が「推し」に対する感情等に及ぼす影響について検討した。高野・奥野(2023)で行われた共分散構造分析では,恋愛イメージ尺度が「大切・必要」「刹那的・付加価値」「相互関係」により構成されていることが示された。このうち,「刹那的・付加価値」は恋愛イメージとの間に負の相関がみられた。

「大切・必要」「相互関係」により「推し」への感情が恋愛感情へと促進されることを確かめるとともに,その他の下位尺度に関しては恋愛イメージに対してどのような影響をもたらすかを検証する。

また,恋愛イメージは恋愛希望度・結婚希望度と大きく関係していることが推測される。恋愛イメージが肯定的になるほど,恋愛・結婚希望度が高まると予想する。

検証課題2 対人恐怖心性と「推し」に対して抱く感情との関連

高野・奥野(2023)は対人関係において悩みを抱えている場合に「推し」への熱中度が高いことを明らかにしたが,本分析では同様に対人恐怖心性が「推し」への恋愛感情を伴う好意にも影響を与えることを予想する。

検証課題3 中学・高校時代の「推し」の存在と恋愛希望度・結婚希望度との関連

「推し」にいつ出会ったのかが、現在の対人関係に影響を与えていると推測される。大倉（2011）は、「恋愛をして初めて人生の味わいがわかる」「恋愛するのが人間として当然」といった恋愛への動機づけを「恋愛への社会化」と説明したうえで、「オタク」男性の恋愛観について以下のように述べた。

思春期にアニメやゲームから「卒業した」（あるいはそう偽装した）大多数の男性はその後「恋愛という市場」に新規参入し、そこで恋愛へと社会化されていくのではないだろうか、一方で多くのアダルトゲーム消費者には恋愛のノウハウを習得する場も、恋愛への社会化される機会も、その主観的必然性を強化するための装置も用意されておらず、従って彼らは恋愛へと社会化されていない、と考えることができるのではないだろうか。

（大倉，2011，p.126）

「推し」を中心に展開される日常を送っていると、恋愛をすることが「推し」に熱中することに置き換わることが推測される。恋愛への社会化が行われていない場合、思春期を過ぎた後も「推し」という存在によって恋愛への興味関心が薄れ、現在にいたるまで、恋愛は必ずしも自身が体験したいものではないという位置付けになるのではないだろうか。以上より、中学高校時代に「推し」がいることで現在の恋愛希望度・結婚希望度が低くなると予想する。

4. 研究方法

4.1 対象者へのアプローチ

Google Formsを利用してオンライン調査を設計し、18歳から29歳の男女を対象に著者の知人に依頼して実施した。

4.2 調査項目

質問項目は「推し」について、結婚状況、恋愛状況、恋愛希望度、結婚希望度、恋愛イメージ、対人恐怖心性についてなどである。

「推し」の有無に関しては「現在『推し』がいる」「過去に『推し』がいた」「今までに『推し』はいない」の3択で回答を求めた。「推し」の属性に関しては高野・奥野（2023）をもとに「アイドル」「俳優（女優）」「声優」「歌手」「スポーツ選手」「動画投稿者」「VTuber」「アニメ・ゲーム・漫画のキャラクター」「その他」から1つを選択し、自由記述式で「推し」の名前を任意で求めた。

「推し」に対して抱く感情は、小城（2004）が行ったファン心理の分類において、全体の75項目のうち「疑

似恋愛感情因子」を構成する13項目の中から抜粋し、10項目について「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

結婚状況は未婚者の回答を抽出するため、「未婚」「結婚している（事実婚も含む）」「その他・答えたくない」の3択で回答を求めた。また恋愛状況、恋愛希望度、結婚希望度に関しては国立社会保障・人口問題研究所による「第16回出生動向基本調査」を参考に、文言を一部改変して利用した。

恋愛イメージ尺度に関しては、金政（2002）によって作成、検証された尺度を利用した。28個の質問項目から、先行研究内で示された7因子を想定し各因子において因子負荷量が高い質問を2つずつ抜粋し、14項目について「非常によく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの7件法で回答を求めた。

対人恐怖心性尺度に関しては、堀井・小川（1996；1997）によって作成された既存の尺度を利用した。質問内容を確認するため、清水・海塚（2002）を参照した。30個の質問項目から、同尺度を利用した高野・奥野（2023）と同様に4因子を想定し各因子において因子負荷量が高い質問を2つずつ抜粋し、8項目について「非常にあてはまる」から「全然あてはまらない」までの7件法で回答を求めた。

また不注意回答者を排除するため、教示文にて必ず選択すべき選択肢を指定した質問を1項目設定した。具体的には「この項目については全員「7：全く当てはまらない」を選んでください。」というチェックのための項目を加えた。

5. 結果

5.1 調査の概要

実査は2024年9月19日から10月3日までの15日間に行った。友人・知人のネットワークを通じて依頼リンクを広げてもらい回収した138票のうち、チェック項目で教示文と異なる選択肢を選択した回答者を無効票とした（3票が該当）。これに加え、既婚者と回答した2名、社会人と回答した5名、自由記述による回答で「推し」が定義から逸脱していた3名を無効票とし、最終的な有効回答数は125名となった。社会人と回答した者を除いたため、有効回答者は学生のみになった。有効回答者のうち男性は40.8%、女性は57.6%となり、年代に関しては最も多いのが20-24歳の66.4%、次いで18-19歳の32.0%となった。

5.2 主な結果

(1) 「推し」についての実態

「現在『推し』がいる」者は81.6%、「過去に『推し』がいた」者は9.6%で、全体の91.2%が「推し」がいる経験があることがわかった。このうち、「中学・高校生

時代に『推し』がいた」者は86.8%であった。以下、択一式の質問で回答者割合の合計が100%にならない場合は、その他の選択肢を回答した者を含んでいる。

(2) 恋愛状況・恋愛希望度・結婚希望度

現在「恋人がいる」者が19.2%、「恋人はいない」者は76.0%であった（その他は「答えたくない・どちらともいえない」）。「恋人はいない」者のうち、「恋人ができることを望んでいる」者は46.5%で、このうち74.5%の者が恋人を作るために何かしら行動を起こしていることがわかった。また、「できる限り早く結婚するつもり」の者は10.4%、「いずれは結婚するつもり」の者は56.0%で、現在の恋人の有無に関わらず全体の66.4%が結婚する意向を持っていた。

(3) 男女と他の変数との関連

性別で「その他・答えたくない」と回答した2名を除いた123名の回答に対し、性別と個別項目に関するクロス集計を行った。 χ^2 二乗検定で有意だった結果を中心に以下に示す。

推しに対して抱く感情に関して、「気がつく、いつも『推し』のことを考えている」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=8.984$, $df=2$, $p=0.011$ ）、「『推し』のためなら、どんなことでも我慢できる」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=6.277$, $df=2$, $p=0.043$ ）の2項目で男女差が有意だった。女性の方が男性に比べて推しを思う気持ちが強く、重要度が高かった。

また、「中学・高校生時代に『推し』がいましたか」も男女差が有意で（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=8.936$, $df=2$, $p=0.011$ ）、女性の方が「中学・高校生時代に『推し』がいた」と回答している者が多い。

女性の方が、恋人がいるという回答が多かった（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=9.982$, $df=2$, $p=0.007$ ）。

今恋人がいらない者を対象に、恋人ができることを望んでいるかどうかを問う質問（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.608$, $df=2$, $p=0.022$ ）では男性の方が、恋人ができることを望んでいる者が多い。しかし一方で「恋人を作るための行動」については、「とくにしていない」という回答は、男性は36.0%、女性は9.5%だった。関連行動の中では、「好感を持たれるよう身なりを整える」、「片思いの相手にアプローチする」に関しては女性の方が行っており、女性の方が恋愛に積極的に行動している。

恋愛イメージ尺度に関しては、「恋愛は常にしていると思う」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=6.145$, $df=2$, $p=0.046$ ）、「恋愛はお互いに成長していくものだと思う」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=11.382$, $df=2$, $p=0.003$ ）の2項目については女性の方が「当てはまらない」と回答した者が多い。

一方、「恋愛は自分の生活の付加価値に過ぎない」（尤

度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.295$, $df=2$, $p=0.026$ ）では女性の方が「当てはまる」と回答した者が多い。女性の方が、恋愛を必要不可欠なものではなく、ステータスの一つと捉えるようなある種現実的な考えを持っているのではないかと推測できる。

対人恐怖心性尺度に関しては「グループでの付き合いが苦手である」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.243$, $df=2$, $p=0.027$ ）の1項目のみで男女差が有意であり、女性の方が「あてはまる」と回答した者が多い。

(4) 現在の恋人の有無と他の変数との関連

現在の恋人の有無を「その他・答えたくない」と回答した6名を除いた119名の回答に対し、恋人の有無と個別項目に関するクロス集計を行った。

「推し」の有無との関連は有意だった（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=10.138$, $df=2$, $p=0.006$ ）。恋人がいらない者の方が「推しがいる」者が多い。恋人がいらない者にとって、「推し」が恋人という日々彩りを与えてくれる存在を代替している可能性がある。

「推し」に対して抱く感情に関して、「気がつく、いつも『推し』のことを考えている」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=6.618$, $df=2$, $p=0.037$ ）、「『推し』のためなら、どんなことでも我慢できる」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=11.319$, $df=2$, $p=0.003$ ）、「他のファンよりも、『推し』を思う気持ちは強い」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.389$, $df=2$, $p=0.025$ ）の3項目で、恋人がいる者の方が肯定的だった。恋人と「推し」のどちらも大切に思い、その気持ちを行動に移している傾向が見られた。

恋愛イメージ尺度に関して、「恋愛は私を幸せな気分させてくれる」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=16.065$, $df=2$, $p<0.001$ ）、「恋愛は相手を束縛してしまうものだと思う」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.552$, $df=2$, $p=0.023$ ）、「恋愛とは自分を磨く機会だと思う」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.905$, $df=2$, $p=0.019$ ）、「恋愛はお互いに成長していくものだと思う」（尤度比 χ^2 二乗検定 $\chi^2=7.286$, $df=2$, $p=0.026$ ）の4項目で現在の恋人の有無が有意だった。いずれでも恋人がいる者の方が肯定する傾向が見られた。

5. 3 因子分析による検討

(1) 「推し」に対して抱く感情

「推し」に対して抱く感情の調査項目は小城（2004）から、「疑似恋愛感情因子」において因子負荷量が高い質問を抜粋し、10項目への5段階の回答に対して因子分析を行い、2因子構造を得た。表1の結果から以下のように因子の解釈を行った。2因子間には $r=0.325$ の正の相関が見られた。なお以下の因子分析ではいずれも最尤法、およびKaiserの正規化を伴うプロマックス回転を用いた。

第1因子：推し不可欠因子

「気がつくと、いつも『推し』のことを考えている」「『推し』のためなら、どんなことでも我慢できる」「『推し』なしで過ごすのはつらい」など、生活における「推し」の優先度の高さを感じられる項目の因子負荷量が大きいため、「推し不可欠因子」と名付けた。

第2因子：独占・排他因子

「『推し』に対する気持ちは、恋愛感情に近い」「『推し』が誰かと付き合っているのではと疑うと落ちついていられない」「『推し』に熱愛が発覚したらショックだ」など、「推し」との恋愛的な好意を自覚し「推し」と他者との恋愛を拒む項目の因子負荷量が大きいため、「独占・排他因子」と名付けた。

(2) 恋愛イメージ尺度

恋愛イメージ尺度の調査項目は金政（2002）から、各因子において因子負荷量大きい2項目をそれぞれ抜粋し、14項目への7段階の回答に対して因子分析を行った。4因子が抽出され、表2に基づいて以下のように因子の解釈を行った。

第1因子：大切・成長因子

金政（2002）では「大切・必要因子」と「成長因子」としてそれぞれ抽出されていたものが結合して1因子となったため、「大切・成長因子」と名付けた。金政（2002）における「成長因子」として因子負荷量が大きかった「恋愛はお互いに成長していくものだと思う」「恋愛はお互いに成長していくものだと思う」の因子負荷が大きい。

表1 「推し」に対して抱く感情尺度の因子分析（回転後のパターン行列）

	第1因子	第2因子
	推し不可欠	独占・排他
気がつくと、いつも「推し」のことを考えている。	0.752	0.060
「推し」に対する気持ちは、恋愛感情に近い。	0.337	0.546
「推し」のためなら、どんなことでも我慢できる。	0.740	-0.041
「推し」なしで過ごすのはつらい。	0.754	-0.112
「推し」のことを思うと、ドキドキする。	0.527	0.220
「推し」が誰かと付き合っているのではと疑うと落ちついていられない。	-0.157	0.780
「推し」の恋人になれるものならなりたい。	0.157	0.497
「推し」に熱愛が発覚したらショックだ。	-0.181	0.842
他のファンよりも、「推し」を思う気持ちは強い。	0.602	-0.066
他に「推し」のことを好きなファンがいると、不愉快になる。	0.098	0.380

表2 恋愛イメージ尺度の因子分析（回転後のパターン行列）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
	大切・成長	束縛・衝動	相互関係	刹那的・付加価値
恋愛は私を幸せな気分させてくれる。	0.528	0.032	-0.053	-0.184
恋愛は常にしたいと思う。	0.515	0.234	-0.287	-0.158
恋愛なんてしょせんアクセサリのようなものでしかない。	0.012	0.089	-0.144	0.775
恋愛は自分の生活の付加価値に過ぎない。	0.000	0.051	0.102	0.697
恋愛には信頼感が大事だと思う。	-0.094	0.031	0.792	-0.001
恋愛はお互いを理解し合うことだと思う。	0.058	0.065	0.757	-0.018
恋愛をすると相手を独占したくなると思う。	0.135	0.521	0.086	0.047
恋愛は相手を束縛してしまうものだと思う。	-0.215	0.625	-0.102	0.125
恋愛とは自分の気持ちを抑えきれなくなってしまうものだ。	-0.107	0.616	0.155	-0.213
恋愛をしていると周りが見えなくなってしまう。	0.201	0.607	0.001	0.047
恋愛とは相手に何かをしてあげたいと思うことだ。	0.245	0.236	0.195	0.019
恋愛とは相手のためにどれだけ自分を犠牲にできるかだと思う。	-0.058	0.348	0.010	0.169
恋愛とは自分を磨く機会だと思う。	0.700	-0.090	0.008	0.117
恋愛はお互いに成長していくものだと思う。	0.672	-0.105	0.298	0.088
因子間相関	1.000			
束縛・衝動	0.170	1.000		
相互関係	0.521	-0.016	1.000	
刹那的・付加価値	-0.378	-0.178	-0.243	1.000

第 2 因子：束縛・衝動因子

金政 (2002) では「独占・束縛因子」「衝動・盲目的因子」としてそれぞれ抽出されていたものが結合して 1 因子となったため、「束縛・衝動因子」と名付けた。「恋愛は相手を束縛してしまうものだと思う」「恋愛とは自分の気持ちを抑えきれなくなってしまうものだ」の因子負荷が大きい。

第 3 因子：相互関係因子

金政 (2002) の「相互関係」と同様の因子負荷パターンを確認できたため、「相互関係因子」と名付けた。

第 4 因子：利他的・付加価値因子

金政 (2002) の「利他的・付加価値因子」と同様の因子負荷パターンを確認できたため、「利他的・付加価値因子」と名付けた。

(3) 対人恐怖心性尺度

対人恐怖心性尺度の調査項目は清水・海塚 (2002) から、各因子において因子負荷量が大きい 2 つの質問を抜粋し、8 項目への 7 段階の回答に対して因子分析を行った。結果は 1 因子とみなされた。極端に負荷が小さい項目がなかったため、そのまま単純加算して対人恐怖心性尺度とした。

5. 4 検証課題の分析結果

(1) 恋愛イメージと「推し」に対して抱く感情、恋愛希望度、結婚希望度との関連 (検証課題 1)

恋愛イメージ尺度と「推し」に対して抱く感情の各因子との相関を検討したところ、恋愛イメージ尺度の「相互関係因子」と「推し不可欠因子」にのみ弱い相関が見られた ($r=0.216$, $p=0.021$, $n=114$, Pearson 相関係数, 以下同じ)。「独占・排他因子」はいずれの因子との関連も確認できなかった。

また恋愛イメージ尺度の各因子と恋愛・結婚希望度との相関を検討したところ、「大切・成長因子」と「利他的・付加価値因子」との間に恋愛希望度・結婚希望度との相関が見られた (表 3)。「大切・成長因子」に関してはいずれも正の相関が、「利他的・付加価値因子」に関してはいずれも負の相関が見られた。

以上のことから検証課題 1 は概ね支持された。

(2) 対人恐怖心性尺度と「推し」に対して抱く感情との関連 (検証課題 2)

対人恐怖心性尺度と「推し」に対して抱く感情の各因子との相関を検討したが、いずれの因子に対しても相関は見られなかった。よって、検証課題 2 は支持されなかった。

(3) 中学・高校時代の「推し」の有無と恋愛希望度・結婚希望度との関連 (検証課題 3)

中学・高校時代の「推し」の有無と恋愛希望度・結婚希望度との関連を検討したが、中学高校時代に「推し」がいたと回答した者が全体の 8 割を超えていたため、本研究では適切に分析が行えなかった。

5. 5 共分散構造分析の結果

変数間の関係のまとめとして共分散構造分析を行なった。「推しに対して抱く感情」が「恋愛イメージ尺度」と「対人恐怖心性尺度」から影響を受けると想定したモデルをはじめ、複数のモデルを検討した。その中で最も適合度が高かったのが図 1 のモデルである。「大切・成長」「相互関係」「利他的・付加価値 (「しよせんアクセサリーのようなもの」の 1 項目のみ採用)」の 3 因子より構成される恋愛イメージ尺度が「『推し』に対して抱く感情」を構成する「推し不可欠因子」に影響を与えることが示された。

3 因子の中でも、「大切・成長」と「相互関係」は「恋愛イメージ尺度」との間に強い正の相関が、また、「利他的・付加価値」は「恋愛イメージ尺度」との間に弱い負の相関が見られた。この結果から、恋愛を自身が成長する機会と捉え、恋愛における態度としてパートナーとの相互理解を重視しているような、総合して恋愛に肯定的で積極的な姿勢をとっている場合、「推し」をより重要な存在として扱うようになることが読み取れる。これは高野・奥野 (2023) の先行研究とも整合的な結果である。ただしモデルの適合度指標は、 $\chi^2 (62) = 110.247$ ($p=.000$), CFI=.879, NFI=.775, RMSEA=.079, AIC=194.247 で必ずしも良好な適合度とは言えなかった。

表 3 恋愛イメージと恋愛観・結婚観の相関

	恋愛希望度 (N=101)	結婚希望度 (全員) (N=125)	結婚希望度 (結婚意思あり) (N=83)
大切・成長	0.281**	0.301**	0.335**
束縛・衝動	0.182	0.032	0.121
相互関係	0.099	0.091	0.046
利他的・付加価値	-0.226*	-0.268**	-0.273*

Pearson 相関係数, *は 5% 水準, **は 1% 水準で有意 (両側検定)

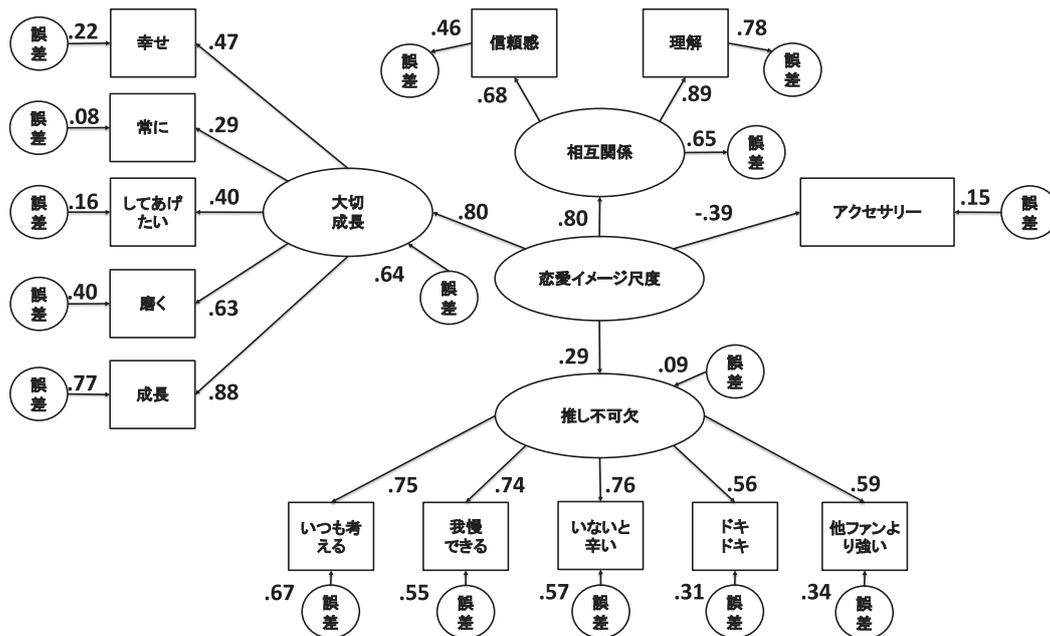


図1 最も適合度が高いモデル

6. 考察

学生が「推し」に対して抱く感情と恋愛観の関連を中心に分析した結果、日常的に関わる相手との対人関係（恋愛観）に影響を受けるような深い感情的経験であることが示唆された。

現在恋人がいない者の方が「推し」がいる者が多かった一方、現在恋人がいる者の方が「推し」への想いが強い傾向も見られ、恋愛にまつわる体験が「推し」に対する態度に影響を与えていることが明らかになった。

なお、本研究では、対人恐怖心性尺度と「推し」に対して抱く感情との関連は確認されなかった。高野・奥野(2023)では、対人関係に悩みを抱えていると「推し」への熱中度が高まるとされていたが、今回の結果からは「推し」は必ずしも現実逃避のための存在とは言えない。

今回は「推し」の定義を比較的広く設定したため、「推し」がいる学生一般の心理を読み解くことができたと考えて良いだろう。一方で、知人を介して依頼した調査ということもあり、「推し」に関する話題に興味を抱いている者が協力者の大半を占めた。加えて、中学、高校生時代に「推し」がいた者がほとんどであった。より広いサンプルに対して調査を実施した場合、異なる結果が得られる可能性もある。

またサンプル数の制約から、「推し」に疑似的な恋愛感情を抱いているファンの中でもより詳細な分析を行うことはできなかった。「推し」への恋愛感情といっても、実際には多様性があることが想定される。「推し」と実際に恋人になりたい者、「推し」に恋愛感情を抱いているが実際に恋人になりたいわけではない者、「推し」と恋人になることを空想し、その行為自体を楽しんでい

る者、好意を抱いてはいるが恋愛感情を自覚できていない者など、恋愛の形が様々であるように「推し」への愛も一様ではない。その意味では、サンプルを増やすことで、ファンの特性をより詳細に分類し、恋愛感情のみを切り出して分析することが求められるだろう。

また今後の研究的な展開としては、より上の年齢層への調査が実現すれば、さらなる知見が期待できる。

20代後半を迎えると、結婚をより自分ごととして考える年代^(注2)となり、実現可能性の低い「推し」との恋愛から実生活における恋愛ヘシフトし、「推し」に対して擬似的な恋愛感情を抱く者が減ると予想される。「推し」に対して抱く感情と、年を重ねることによって生まれる結婚に対する意識の違いという切り口には研究の展開の余地があると考えられる。

調査対象者の数を増やし年代も幅広くすることで、「推し」に対して抱く感情と恋愛観等の関連をより詳細に紐解くことができるのではないだろうか。特に20代後半以降の年齢層への調査ができれば、恋愛観・結婚観との関係の分析がより大きな意味を成すようになるだろう。

謝辞：

アンケート調査にご協力いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

注

(注1) 株式会社矢野経済研究所による国内の「オタク」市場調査を参照した。

https://www.yano.co.jp/press-release/show/press_id/3383(最終確認日 2025年1月28日)

- (注2) 厚生労働省が公表した令和5年(2023)人口動態統計月報年計によると、平均初婚年齢が男性は31.1歳、女性は29.7歳となっている。
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/dl/gaikyouR5.pdf> (最終確認日 2025年1月28日)

参考文献・URL：

- [1] 栗津俊二・金谷春佳・加藤奈々(2021)「恋愛要素のある二次創作物への思考：夢女子の恋愛観」『日本認知科学会第38回大会論文集』, p. 65-70
- [2] デジタル大辞泉「「推し」の意味・読み・例文・類語」
<https://kotobank.jp/word/推し-2132332#w-2230498>
(最終確認日2025年1月27日)
- [3] 堀井俊章・小川捷之(1996)「対人恐怖心性尺度の作成」『上智大学心理学年報』第20号, p. 55-65
- [4] 堀井俊章・小川捷之(1997)「対人恐怖心性尺度の作成(続報)」『上智大学心理学年報』第21号, p. 43-51
- [5] 金政祐司(2002)「恋愛イメージ尺度の作成とその検証：親密な異性関係, 成人の愛着スタイルとの関連から」『対人社会心理学研究』第2号, p. 93-101
- [6] 国立社会保障・人口問題研究所(2023)「現代日本の結婚と出産-第16回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書-」
- [7] 小城英子(2002)「ファン心理の探索的研究」『関西大学大学院人間科学』第57号, p. 41-59
- [8] 小城英子(2004)「ファン心理の構造(1) ファン心理とファン行動の分類」『関西大学大学院人間科学:社会学・心理学研究』第61号, p. 191-205
- [9] 高野紋佳・奥野雅子(2023)「現代青年の対人関係のあり方が推しとの関係性に及ぼす影響—「恋愛的推し」に着目して—」『現代行動科学会誌』第39号, p. 41-50
- [10] 大石百華(2023)「「オタク」と「ファン」の意味変容からみる「推し」概念の拡張：尺度研究における構成概念の異同と変遷に着目した考察」『九州大学教育社会学研究集録』第26号, p. 37-61
- [11] 大倉韻(2011)「現代日本における若年男性のセクシュアリティ形成について—「オタク」男性へのインタビュー調査から—」『社会学論考』第32号, p. 109-134
- [12] 清水健司・海塚敏朗(2002)「青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連」『教育心理学研究』50巻1号, p. 54-64